

幼稚園に慣れるまで

久仁子の母

1. 日曜を恨む

「さうして日曜日があるんでせうね。カレンダーから日曜だけこつてしまふからい。」

十月初の或日曜日の朝「今日はおさうちやま、お家ね」。

喜んでゐる弟には和さないで、カレンダーの赤い札を見つめてゐる久仁子は、いきなりかう號びました。

「まあをかしいこと、いくらお家のカレンダーだけはがしても、幼稚園は今日はお休よ。あなたもいらつしやらないわ。」

「こいつても、依然としてむつこしたお顔です。お辨當がない、お附はいらぬ、時間の制限がないといふので、ねえや初め家族の命の洗濯日である日曜を恨むのは、恐らく久仁子だけでせう。それにしても、

「日曜日よ、永久に来るなかれ。」

幼稚園よ、いつもお休みでないやうに。」

こいふ無邪氣な、併し眞剣な願をきゝながら、母親である私の胸には、あまりに曲折の多かつた入園以來の久仁子の幼稚園生活が、まざまざと蘇つて來るのです。

2. 初登園

昭和九年四月九日は、久仁子が初めて家庭以外の生活に踏み入つた日です。生憎私は次女の出生のために入院してゐる家に居りませんでしたので、カづけの言葉一つかけられない離れた境遇ながら、揃へておいてやつた洋服を著けたであらう初登園の我が子の姿を脳裡に畫いて、何か祝福したいやうな氣持で一杯でした。

十一時にお父様と久仁子とこねえやが、今幼稚園からの歸

りさいふので立寄つてくれました。徽章をつけて、お帳面やお道具も頂いて、何さいふクラスで、受持は新庄先生なき、幼稚園のお話ばかり、ニコ／＼してゐる久仁子、昨日産れた赤ちやんを中心にして、喜びの二重奏も奏でまじき空気が、ねえやの「お返事がお小さくて」さいふのが、少々氣にかゝりながら、まづ／＼初めだからと唯機嫌よく、「これから毎日お歸りに寄つて、幼稚園のお話して下さいね。」

「お約束して歸しました。」

3. 母親退院

私のゐない間は、里のおばあ様が、バスの所迄必ず送つて下さるのだが、餘り元氣がないこのこ、ねえやのそばばかりにく／＼、いゝてゐる少しも離れないこのこ、其後聞えてくる情報はあまりかんばしいものではありません。

「ほかの方々には皆お母様がお付きになつて……」。さいはれるのが胸をさゝれる思ひ、かくては一日も早く退院して、十七日大事をこりつゝも我が家へ歸りました。その日の久仁子の生き／＼した姿、ねえやもびつくりしたやうに

「今日はお遊戯もなさるし、お唱歌も何でも皆様と御一緒によくなさいました」。さいふ。母親さいふものは、やつぱり子供に無形の引力があるのだ、その時強く思ひました。次の日お床のそばへ挨拶に来た久仁子を、それこそ母親としての心のすべてを傾けて送り出したつもりでした。……、昨日ほきの元氣でないさいふこで歸つて来ました。

「折角歸つて来たお母様は、私のものではなくて赤ちやんのものだった」。

さいふ失望を起したのかもしれないと思つた私は、赤ちやんの世話時間は時間で定めて、それ以外は久仁子達を枕元へ呼んで遊びました。が急に起つた義弟の結婚問題に、私ミ子供ミを結びつける時間は遠慮なく割かれるばかりでした。

4. 一策

一日別の下女に弟を伴れさせて迎へにやりましたら、お姉様ぶりを發揮して先生へのお歸りの御挨拶も立派だったこのこに弟の手前ならお遊戯もするかもしれないさいふ

一策が浮びました。翌日から私が弟をつれて久仁子に附添ひました。二日續けて見るに、弟さばかり遊ぶやうになつて少しもお友達に交らないといふので、脆くも失敗です。併し遊戯以外の作業もさうやら皆様と御一緒にしてゐるやうで、お話など伺ふご時々ニコ／＼してゐるのを見るに面白いらしいのですが、唯お教室の隅に家の者が誰か一人居なければならぬのが缺點です。お歸りはとても楽しさうで同方面のお友達さはいつもお手々をつないで御一緒に歸るのでした。

5、家庭に於ける久仁子

月が變り私も大方丈夫になりましたので、家の中をつめて幼稚園化するやうに致しました。夕食をすませて、弟も女中も久仁子にお遊戯やお唱歌を習ひます。私が伴奏がかり、おもちゃのグラウンドピアノを提出したり、蓄音機をかけたります。小さい先生が、「その手を膝に」「その手を——頭に」「いふに、皆の手が一齊に膝に、頭に止ります。「櫻々彌生の空をば見渡すかぎり……」と歌つて、久仁子と弟のお手々の間をくゞるねえやは、餘りに大きすぎ

ました。こんなに見てゐるだけでよく覺えてくると思ふばかりです。

「こんなにお上手なのに、さうして幼稚園ではなさらないの」。

と申しても微かに笑つてゐます。

「今日は齒醫者にお見せにならないといつて、お泣きでした」いふのが五月十六日、「試験の時はあんなに大人しかったのに……」。さ少々根がつきさうです。

「久仁子さん、今日はお利巧だつたのでせう」。

と一寸からかつたら、

「久仁子、今日は泣いたのに、さうしてお利巧なの」。

と反對に詰問されてつまりました。

6、最初の父兄會

翌日は父兄會がありました。子故に親の肩身の狭さを感じて先生のお顔もまごもには拜し得ぬ思ひ、倉橋先生のお話が又一々心に應へるこまばかりです。

「お繪が下手でも、唱歌が調子はづれでも、私共では重大視してはゐない。唯健全なる方法、健全なる精神であ

るか否かは、私共の最も心を用ふる所、ここに後者の問題、心の健全でないお子さん位心配するものはありません。——中略

朝出かける時の御子さんの元氣は、正に、帆を張つて、朝の海を漕ぎ出さうとする船のやうなもの、その充ち溢れた元氣を迎へる港は幼稚園です」。

毎朝久仁子にこんなすが／＼しい形容をあてはめられないことは、さては健全なる心に缺けてゐるさいふものか、一體この入園兒數十人中の異例さいふなら、數十人に一人の割の我が儘者さいふわけになるなぞ、いよ／＼親の責任を感じて先生におめにかゝるさ、

「お泣かせすればわけないのですけれど、やつぱり年をとりまして、時を待つやうになりました」。

さのお言葉に涙さへ浮びます。頂いた入園記念のお寫眞に久仁子のついてゐるのをせめてもの土産に家へ歸りました。久仁子はさても喜んで飽かず見てゐました。

7、斷然附添を離す

次の週からもうそろ／＼御子様をお附の方からお離しし

たいさの御宣告があり、久仁子は來週金曜日にするさいふことを下女迄お洩し頂きました。それ迄に少しは離れないかしらさ申しませ、力づけても見ましたが、大した進歩も見ず次の週の木曜日になりました。

「さあ明日は又早く幼稚園へゆきませうね」。

さ寢床へ送りながら、明晩の今頃を考へて見ないわけにはゆきません。無理に引き離されてそれから續いて通ふかしら、恐らく幼稚園の洋服を枕元に揃へて寝るのは、今宵が最後かもしれないやうな氣がしてなりません。父は旅行中さて、一人で明日の試練の結果を案じながら何もしらぬ寢顔を覗き込むのでした。

翌日は元氣に出かけました。十時頃幼稚園からお電話、

「今お附を無理に離しましたら、暫くお泣きでしたが、

もう黙つてさてもお利巧ですから、今日はお歸りに御褒美をあげて下さい」

半ば久仁子に半ばこちらへお話下さるやうな先生の御口

調、思はず息をはづませて。

「え、何でも買つてあげますからさおつしやつて下さい」。

お歸りには私が迎へに参ります」。

「まあ久仁子さん、今日はお母様のお迎へよ」。

「いふお聲がはつきり聞えてお電話はきれました」。

「さつき同時に附添つてゐた下女があたふたさ戻つて來ました」。

「今日はお室へお送りするなり、先生が」

『今日はさうしてもあなたさお離ししたいのですが、あなたに出來ますか』「さおつしやるので、何が出来るのか分らないけれど」はい、出來ます』「さ申し上げてしまひましたら、お嬢様のお手を握つて、『さああなたは早く歸つて下さい』。このさ、わあつさ泣き出すお聲に、後髪引かれる思ひでしたが、歸つて來ました」。

「あゝもういゝの、今もう泣きやんでおさなださお電話があつたのだから」。

「さ心配さうなのを慰めてやつて早速お迎への準備、いつもお歸りの時間待つてゐるさ、久仁子をつれて先生が出ていらつしやつて、」

「お辨當の時少し淋しくおなりになつたさ見えて、しく

しくなまつてよく召上つてゐませんか」。

さか

「けふは上出來ださいふ方ではありませんから。それから御褒美はちよつさしたものを」。

「さかういふ細かい御注意を頂いて、今日はもう歸つてもよいこのさ、」

「あした又先生さ御一緒に遊びませう、ね、指きりませう」。

「さおつしやつて、久仁子の小指にお約束の印を下さいました」。

新宿で降りて請はれるまゝに御褒美を與へて、「えらかつたのね、強かつたのね」。さ頭を撫でゝやりました。「明日の晩はさうなる事か」。

「さ思つた枕邊に又お洋服を揃へて御褒美の品々も並べて眠る我が子を見る事が出來ました」。

「先生さいふものはやつぱりおえらい。ちゃんさ時機を見るさこさがお出來になる。それに強く出ても子供の心をお傷つけにならない」。

ミ一層感謝ミ敬服の念を深めました。

8、登園前のためらひ

次の朝、

「ねえやが歸るならいや」。

ミいひ出しました。土曜日ではあるしすぐ退けるのに遠い處を往復するまでもありませんので、

「控室にちゃんミ待つてゐますよ」。

ミいつて出しました。後、幼稚園へかういふ條件に出した旨を通じておきました。次の週から必ず朝「歸るかどうか。」を確めねば出かけません。それに幼稚園の方も宮様がお出でになるミかで御用がおりになつたりして、先生もお差支へ多く、締めたたがもゆるむべく餘儀なくされました。

9、缺席の試み

次の日曜日六月三日長の旅から歸つて來た父は、久しく會はなかつた子供に甘くなつてゐましたので一部始終を聽いた時、

「そんなにいやなら家で遊ばせておいてもよいではない

か」。

ミいふ事を洩しました。これは多少心の弱くなつてゐた久仁子には、大きな味方で、今迄曾つて言はなかつたのに「お休みしたい」ミ申すのです。宮様がお成りならお邪魔になつてもミ、次の一週間はミうミう缺席させました。

併しその一週間の久仁子は言ふミ爲すミ幼稚園の生活以外に出でません。近所の子供が遊びにきてても、久仁子が皆をリードしてゐるので、砂場でも、江り臺でも、折紙でも、お繪かきでも、遊戯でも、「幼稚園ではかうするのよ」。ミいかにミなつかしさうにそのまゝを我が家で再現してゐます。

一日里へ遊びに参りました。上の弟が、

「なぜ幼稚園へ行かないの、休んぢやだめだね」

ミ申したら、

「あら叔父さんだつて幼稚園嫌ひで、先生におんぶして歸つて來たミおばあ様が仰つたことよ」。

ミの逆襲には、頭をかいて、進言の資格を失ひました。

下の弟は及川先生にお教へ受けたので、ミうかして繪の

方からでも興味を持たせようよ、時折指導してくれてるま
したが、もうこの頃は、

「久仁子ちゃんは望がないね。」

ミ匙を投げた形。おちい様は、

「先生はおえらい先生だよ。こんなに厚い御本をお作り
になつてゐる。それに昨夜久仁子が元氣でお遊戯してゐ
た夢を見たから、もうそろそろ出来るに違ひない。」

おばあ様は、

「久仁子ちゃんが慣れたら三越で何を御褒美に買ひませう

ね」

ミそれづくに力つけて下さいました。

10、再び登園

一週間の生活状態から考へられることは、

「慣れないミはいふものゝ、かうも根強く植えつけられ
た幼稚園ならば、久仁子にまつて楽しくない筈はない。

附添ミ離れないさいふのも一つは我が儘から、もう一つ
は初めにあまりはにかんで、皆様のお仲間に入る機会を
逸してしまつたのだ。」

さいふ事です。それで次の週から又私がついて登園させ
ました。そして先生におたづねして見ました。

「一體こんなに慣れない例がありませんか。」

「えゝ、あります。先年も坊ちゃんでしたが。唯こ
の方の場合はお家と思ひきりよくて、泣いてもあばれて
も幼稚園へおくミさつさミ歸つてしまはれるのです。そ
れでも終には幼稚園が好きで好きでたまらなくおなりに
なりました。」

「つゞいて通はせるのがこの子のためでせうか。」

「そりやさうです。ミも。」

「この子の爲」さいふを特に伺つたのは、三月五日入
園前の保護者會で倉橋先生のお話に大變反省させられた私
であつたからです。

「この幼稚園に入つて人格者になるだらうミ期待する方
があるならばお断りします。この幼稚園はむしろ御子さん
を惡黨にするかもしれません。但し幸福なる惡黨にしてあ
げます。私共はいつも御子様の背後にある大きな親心を胸
にえがいては、いかにすれば御子様を幸福におさせ出来る

かゝ第一の念願です」。

「子供の幸福」。親にしてもより願はぬ筈はない。併し自分が今迄子供に對する時「よい子」なるものが先に立つ願であつたやうに思ふ。「よい子」必ずしも「幸福なる子」ではない。天來の邪氣のない童心を、大人の道德觀で、狭い小さい世界に押し込めようとしてゐるた危い崖の一步手前で止めて頂いたお話であつたのです。それからすべての規準を「子供の幸福」いふことにおいてゐます。このやうに家庭からまだ離れ難い子供を通してさういふものかを伺ひたかつたのですか、今の先生のお話のお家から見ると、確かに親の「思ひきり」が缺けてゐるたさいふことに心付きましたので、むしろ第二の斷然たる御處置に出て頂く事を御願ひして別れました。

11、幼稚園を面白がる曙光

其後一週間ほゞして家へ歸つて來た久仁子が、

「おつきのお話もう一度しませう」。

「さ笑ひころげてゐます。下女が微かに、

「今日は幼稚園が面白くおなりになつたらしいのです」。

「ささやくのです。よくきく、次の様な話でした。○

子さん△子さんがお膝を出してそれをペチャ／＼たゝきながら、おまゝごこのお臺所を背にして「ダマレかさんがお家に來ないかな」。さ節面白くいつていらつしやるさ、新庄先生がお通りになつて、「あらおひざ小僧さんがちやんさお家に來てゐますよ」。さおつしやつたので、あわてお膝をかくしたお二人は笑ひが止らなかつたさこのこと。それを見て久仁子もさてもをかしさうにしてゐたさうです。それで弟を△子さんにして「こんなことしていらつしやつたのね」。さ無理に膝を出させては笑つてゐます。

又二三日立つて「今日も面白かつたのよ」。さ今度は自分で話したのは、

「倉橋先生が○さんの親指の爪に顔を畫いて下さつたら、晝食の時廻つていらつしやつて、

『爪の赤ちゃんにも御飯をあげないさ泣きますよ』。です

つて」。

「さいふのです。

それから二十一日又手を握られて附添さ離されました

が、こんごは先生のいらつしやる所久仁子あらざるなき有様、教官室にでも、本校にでも、ピアノのそばにでも、形ご影の如く、腰巾着の如く、唯お傍についてゐるやうになりました。その頃です。

「久仁子もお家へ歸つたらほんたうの先生になりたいから、お袴つくつて頂戴」。

ご申したのは。早速赤い袴を作りましたら、色が先生の違ふまで少々不服でした。

12、第二學期

夏休みは相變らずお砂場やお遊戯で、六十日を一日の如く同じ事を繰返しました。休みの終り頃は切りにお友達のお名を思出してはなつかしがつてゐました。

さてこの二ヶ月の成長がさういふ結果になると思ひながら、九月十一日、第二學期の始業式に参りました。この日は皆様もお母様についていらつしやるので、久仁子も離れません。又明日から第一歩より繰返すのかご危んでゐましたら、次の日先生が、「さあ、いらつしやい」。ごおつしやるご、そのまゝすん／＼いつたさうです。そして次の日

も、次の日も續いて、久仁子もまづ／＼林の組の一員になりました。九月末に下女が歸るなり申すのです。

「昨夜私の折つて差上げた紙バッグをお歸りに皆様持つていらつしやつて、『久仁子さんに折つていたゞいたの、私も、私も』ごお見せになりました」。

「みなさん折つて／＼ごおつしやつて久仁子でも忙しかつたの」。

ご自分も嬉しさうに口を添へました。

子供ながらに皆様に伍してゆかれるさういふ自信を持つ機縁もなつたのだらうと思ふご、こんな些細な事實も見のがすごきは出来ません。

「あなたの紙バッグも、では、大切な役割をつこめたわけね」。

ご下女にも申してやりました。

十月十九日には明治神宮外苑で運動會がありました。誰も赤ちやん相手の留守番役は快しきしないで、前半後半に別れて交代しましたが、我が子の初登場に微笑む父が交代の時を忘れてしまつたのも、許すべからずして許すべ

き事でせう。日の丸行進や、兄弟雀は、弟も家の幼稚園で習つて知つてゐたので、一緒に出てやりたいやうだつた。このこに、久仁子の新庄先生も、教へ方は相當なものだ。笑ひました。

十月二十九日は本校創立を六十周年記念日、皇后陛下の行啓を仰いだこが、子供心にも嬉しかつた。見えて、賜つたお菓子は、自分の机の上に載せておいて、人様にはお見せしても、一口も頂かないうちに固くしてしまひました。當日の新聞に出たお姿を、

「これ久仁子忘れるまいから」。

こ切り抜いてお帳面に貼つたのも、すべて自分の心から出たこでした。

13、最近の状態

この頃はお家へ歸るこ、静かにお繪かきや、御本讀みで、以前ほごはしやぎ廻りません。幼稚園で思ふ存分飛びはねるので、家では静かにしてゐたいのでせうが、それは初の時代を反對の現象です。四角な真白い布を要求してはその布に繪を畫いてハンケチを作つたり、銀紙チョコレー

トを紙だけ蓄めてお菓子の形に丸めて見たり、幼稚園での作業の片鱗は、久仁子の家での仕業によく表はれて出ます。日曜日のあるのを歎いた久仁子も、今は少々お寢床の暖かさを樂しむやうになりました。そして平日は反對に、家での活動はこの日を以てレコードします。蓄音機の伴奏に合せて飛びはねる後を、弟がまねして追ひかけます。時には父も、母も、下女も、一緒になつて、大人の生活も今や子供に還元しつゝあるこいつてもよいでせう。

「なれたら御褒美あげませうね」。こは四月以來の言葉でした。併しすつかり慣れてしまふこ御褒美などは欲しくないやうです。子供は物を打算的に考へない。行爲を報酬を結び付ける大人の世界より遙かに純真です。一家を擧げて子供の世界に同化し、幼稚園の家庭的延長を計る事が一番よい御褒美であるこに氣付いたので、五月二十五日以来そのための品物は與へませんでした。唯遊ぶ設備については、著々揃へてやるつもりでありますが……。

最近「女子高等師範學校附屬幼稚園」こいふ長い名前が言へるやうになりました。愛校心こいふものはやはり持つて

るるこ見えて、過日こんなことがありました。里の弟(帝大生)に向つて、

「叔父さんなぜ久仁子の學校へ入らないの、よい學校なのに……」。

「お申しますので、弟は、

「をかしくつて、叔父ちゃんにはそんな學校へ入れませ

んよ」。

「いふに、自分の學校を悪く言はれたと思つたらしく、

「久仁子斷然怒つちやつた」。

「生意氣な口をきいて向ふへいつてしまひました。後で

「叔父さんは男だから男の學校へお入りになるの」。

「説明しておきました」。

幼稚園に慣れるにつれて、身體がリズムカルになつたの

も一つの進歩、家の中でも、路上でも、プラットホームで

も、スキップや遊戯のフォームが、手に足に、隨時に出る

のです。最初通園時間の長いのを心配したものゝ、その頃

のピチ／＼した元氣に充ちた久仁子では、氣分の上ですつ

／＼短縮出来るやうに思ひます。

寝る前に自ら「考へたお話」を名付けて所望します。弟の桃太郎や、兎と龜、浦島太郎などの昔噺以外の意味です。

でもその虎の巻は「幼児の楽しむお話」なので、「これ先生と同じね」を時々脱線します。そうして安らかな眠に入る久仁子に、明日は又楽しい幼稚園が待つてゐてくれるのです。

* * * * *

親以外に自分を可愛がつて下さる先生の存在を知つた久仁子、自分と同じ世界にゐるお友達を持つ樂しさを知つた久仁子は、今や眞に「幸福なる子供」の部類に入れたまひませう。

やはらかき性の芽生えのいつ方に

むくもたやすきおそろしさ知る。

(昭和十年一月二十五日記)